



TITLE:

巻頭言

AUTHOR(S):

河井, 宏允

CITATION:

河井, 宏允. 巻頭言. 技術室報告 2011, 12: i-ii

ISSUE DATE:

2011-03

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/233435>

RIGHT:

巻頭言

技術専門委員会委員長 河井宏允

昨年の技術室報告の巻頭言の最後に、吉田前室長の退職に伴い新しい技術室長を公募しているとした。新技術室長の公募は、平成21年12月末に京都大学のウェブ上で開始、平成22年3月1日に終了した。幸いなことに10数名の方々に応募をいただくことができた。平成22年3月15日に書類選考で選んだ方々との面接を実施、新技術室長候補を決定した。現在の技術室長の高橋秀典氏である。

面接をさせていただいた方々の防災研究所にかける期待と技術室の運営に対する意気込みをおうかがいするにつけ、防災研究所の持続的発展の為に技術室の果たす役割の大きさについて再認識するとともに、技術専門委員長として更なる努力が必要であるとの思いを新たにした。

高橋氏を採用する際に問題になったのは、吉田前室長が退職された後、高橋新室長の着任までの間、技術室長が空席となってしまうことであった。新しい技術室長に決まった高橋氏は、日経コンストラクションの副編集長であり、すぐに着任することが難しく、着任は早くとも3カ月後、遅ければ平成22年12月になるかも知れないということだったからである。したがって、高橋氏を採用する場合、誰かが空席となった技術室長を兼務しなければならない。事務に相談した結果、技術室長は教員でも可能とのことであったので、岡田所長の命令により、はからずも私が技術室長を兼務させていただくことになった。

平成22年度から技術専門委員会委員長として、月に一回、技術職員と懇談をさせていただいていたので、技術職員については大凡のことを把握していたが、あくまで技術専門委員会委員長として技術職員と接していたわけであり、技術室長として技術職員を直接指導することはなかったので、戸惑いながらの室長就任であった。

初めて技術室例会に参加した時、事務室などとは異なり技術室は極めて民主的でフラットな組織であるという印象を持った。また、各人が違った部門・センターを支援していることもあり、それぞれの仕事の内容も大きく異なり、その結果各人が持っている技術職員像も様々であることをあらためて実感した。技術職員は技術職という専門職に誇りと情熱を持って取り組んでいるものの、技術職員として誇れる専門技術とは何かということを各技術職員が模索しており、はっきりとした解を見つけられずにもがいているように見られた。

昨年度に吉田前室長にお願いした結果、例会では、技術職員が交代で議長と書記を務めることになっていた。このやり方は、技術職員にかなりの負担を強いていたが、各技術職員が技術室の運営の一翼を担っている意識を養うとともに、何をどのように議論し結論に導くか、議事録とはどのようなものであるかを各自が考えるきっかけとはなったと思う。作成された議事録については、室長代理の坂さんに添削をお願いするとともに、私もできる限り時間を見つけて添削した。自分の書いた文章を他の人に読んでもらう、あるいは他の人の文章を真剣に読むという習慣が文章アレルギーをな

くし、自分の考えを正確に伝えるうえで大いに役立つと考えたからである。自分では当然だと思っていることが、他の人には必ずしもそうではないことを知ることは、他の人とのコミュニケーションをはかる上で極めて重要である。私も議事録の添削を通して、個々の技術職員の努力や思いを感じ取ることができ大変勉強になった。技術室の例会は単なる仕事の打ち合わせの場ではなく、技術職員のコミュニケーションをはかる場として、大切な役割を果たしていると考えている。

技術室長になってからも月一回懇親会を行った。私にとって、自分の息子や娘と同世代あるいはそれよりも若い世代の方々と楽しくお話できることは何よりの喜びであり、未来へと繋がる大きなエネルギー源であった。技術室長として過ごした9カ月。ずっと教員として過ごしてきた私の人生に、新たな華をもたらしていただいたような気がする。短い期間ではあったが、技術職員の皆さんには心から感謝をしたい。

今後、高橋新室長を迎えて、技術職員が気持ち良く仕事をし、各人が持てる能力を遺憾なく発揮するとともに、その向上を目指して研鑽し、技術室が防災研究所の持続的な発展に大いに寄与することを期待している。防災研究所における私の在任期間も後1年余となった。残されたわずかな期間ではあるが、今後とも防災研究所および技術室のお役に立てるように努力をしたいと思っている。